

幕末京都の学習院

本稿では、幕末の京都に設置された、公家の教育機関である学習院の概要を記しつつ、学習院の設立が公家社会にどのような影響を与えたのか、その歴史的意義を明らかにしていこう。

学習院については、本多辰次郎氏や大久保利謙氏の研究に詳しい。すなわち、天保13年(1842)10月1日、仁孝天皇の意向によって、学習院の建設が、江戸幕府へ申し入れられた。その目的は、困窮した堂上公家の乱れた風紀を糾すためであったという。その後、老中水野忠邦から許可があり、弘化2年(1845)11月27日、学習院伝奏に三条実万、学頭奉行に勘解由小路資善・東坊城聡長らが任命され、開講の準備にあたった。そして、同3年5月、禁裏御所建春門の外に所在した開明門院の跡地に講堂が竣工され、翌年3月9日に開講の運びとなったのである⁽¹⁾。

学習院の設立に際しては、学頭勘解由小路資善・東坊城聡長が作成した学則が定められた。すなわち、

学則之事 履聖人之至道 崇皇国之懿風
不誦聖經何以修身 不通国典何以養正
明弁之務行之

とあり、儒学を学ぶことで身を修め、和書を明らかにすることを通じて正道を実践できるのだ、という趣旨は対句になっており、両方そろってはじめて学問を行えるのだという漢魂和魂を基礎としていることが明らかである⁽²⁾。

では、学習院の学則が、講義等にどのように反映したかという点、学習院では、漢籍をテキストとして講師が講義を行う「御会」(以下では、漢書会と称す)が、毎月9がつく日に月3回開催されたところから始まった。そして、和書をテキストとする「和御会」(以下では、和書会と称す)が開講されたのは、嘉永2年(1849)からで、毎月26日に月1回開催された⁽²⁾。

漢書会・和書会において、講師をつとめた人物は表に記す通りである。特に、漢書会の講師には、当該期の京都で著名な儒学者が就任した。また、和書会の講師には、文久2年(1862)閏8月、宇都宮藩の建議によって始まった文久の修陵事業において、中心的な役割を果たした山陵考証学者谷森善臣が就任していたことが特徴として挙げられよう⁽²⁾。

開講に際しては、「学習院条目」が定められ、聴衆は、堂上・地下などを問わず、15才以上40才以下の者とされた。ただし、40才以上でも希望者は参加できた。

また、漢書会の出席者や人数を検討していくと、年齢層は20代から30代が中心であり、開講してから嘉永2年までの堂上の聴衆は、60人から70人程で、非堂上人の聴衆は、10人から20人程であった。しかし、文久期以降、出席者が極端に減少した。堂上については、出席者が半分以上となり、少ないときは、10人以下であった⁽²⁾。この原因については、文久2・3年の一時期、学習院の講堂が政治的な空間として利用され⁽³⁾、講義が開講されることが少なくなったからだと考えられる。すなわち、当該期の政治状況の急激な変化が、学習院の実態にも反映し、文久期以前と以後とは、学習院の果たす役割に何らかの変化が生じたことが考えられよう。



歴史科教授用参考掛図
仁孝天皇(左 明治43年)・孝明天皇(右 明治44年)



学習院学則(弘化4年 学習院大学図書館所蔵)



三条実万公肖像(梨木神社所蔵)

最後に、学習院設立の意義について考えたい。近世後期の公家社会には、漢籍や儀式書・六国史をテキストとして、縁戚関係や交際関係でつくる、いくつかの勉強会が開催されていた。特に、光格天皇や仁孝天皇が主催した「御会」(天皇の御前で、近臣らがテキストを会読する)に参加した公家は、「御会」に参加する公家同士や、講師を招いて熱心に予習のための勉強会を行っていた。以上のような近世後期の公家社会における勉強熱の高まりを背景にして、学習院が設立されたのである。

そして、学習院の設立によって、講堂という「場」がつくられ、学習院に出席する公家は、同じく講師から講義をうけることで、門流や家格にとらわれずに学べたのである。また、現実的な政治問題までを視野に入れた講師から講義を受けることで、互いに刺激しあいながら連帯の意識を形成させていった。すなわち、幕末に学習院が設立された意義とは、近世後期に分散していた公家の勉強会が、一つの「場」に集約されたことであったのである⁽⁴⁾。

(公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会
学芸員 佐竹朋子)

注

- (1) 本多辰次郎「学習院創建及其沿革」(『史学雑誌』26巻4号、1915年)。大久保利謙「幕末京都の学習院」(『明治維新と教育』吉川弘文館、1987年)。
(2) 拙稿「学習院学問所の果たした役割」(朝幕研究会編『近世

- の天皇・朝廷研究 第2号—第2回大会成果報告集—」学習院大学人文科学研究所、2009年)。
(3) 家近良樹「幕末期の朝廷に新設された国事審議機関について」(『日本歴史』448号、1985年)。
(4) 拙稿「学習院学問所設立の歴史的意義」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第2号、2003年)。
(付記) 中嶋諒氏から貴重なご意見を賜った。感謝申しあげる。



現在の京都御所学習院跡

□ 漢書会講師一覧表 (大久保利謙「幕末京都の学習院」、笠井助春「近世藩校に於ける学統学派の研究」(吉川弘文館、1969年)から作成)

| 名前 | 就任時期 | 退任時期 | 出仕名 | 身分 | 学派 |
|-------|--------|--------|------|------------|-------------------|
| 寺島俊平 | 弘化4年6月 | (嘉永2年) | 藤原天祐 | 九条家家臣 | — |
| 岡田六蔵 | 弘化4年6月 | (嘉永3年) | 源亀 | — | 岩垣龍溪門下 |
| 牧善輔 | 弘化4年6月 | 文久3年 | 藤原靱 | — | 頼山陽門下 |
| 大沢雅五郎 | 弘化4年6月 | 文久3年7月 | 藤原敬邁 | — | 鈴木恕平門下 →山口菅山門下 |
| 中沼了三 | 弘化4年6月 | 休会まで就任 | 藤原之舜 | (父は医者中沼養親) | 鈴木恕平門下 |
| 合谷三吉 | 文久3年2月 | 休会まで就任 | 劉霧 | — | 広瀬淡窓門下 |
| 梅辻平祐 | 慶応元年2月 | 休会まで就任 | 祝部更張 | 妙法院門室儒士 | — |
| 貫名右近 | 慶応元年2月 | 休会まで就任 | 藤原祁 | 一条家儒士 | — |
| 秋田稲人 | 慶応元年2月 | 休会まで就任 | 源晴 | — | — |

□ 和書会講師一覧表 (『学習院仮日記』(宮内庁書陵部所蔵)から作成)

| 名前 | 就任時期 | 退任時期 | 出仕名 | 身分 | 学派 |
|---------|--------|--------|------|---------|--------|
| 小泉将曹康敬 | 嘉永2年2月 | 嘉永5年6月 | 坂上康敬 | 三条西家外記 | 本居大平門下 |
| 勢多大判事章武 | 嘉永5年6月 | 安政5年5月 | 中原章武 | 地下官人 | — |
| 谷森善臣 | 安政6年5月 | 休会まで就任 | 平種泰 | 三条西家外記 | 伴信友門下 |
| 出雲路定信 | 安政6年5月 | 休会まで就任 | 齋部定信 | 下御霊神社神主 | — |
| 樹下茂国 | (文久元年) | 休会まで就任 | 祝部茂国 | 日吉神社神官 | — |